

2026
夏号

季刊

文化財新聞

知れば知るほど 大野がみえる



越前大野と飛騨高山

●大野と高山をつなぐ金森長近

福井県大野市と、岐阜県高山市には大きな共通点があります。それは両市とも、「金森長近」が市街地の基盤を整備したということです。

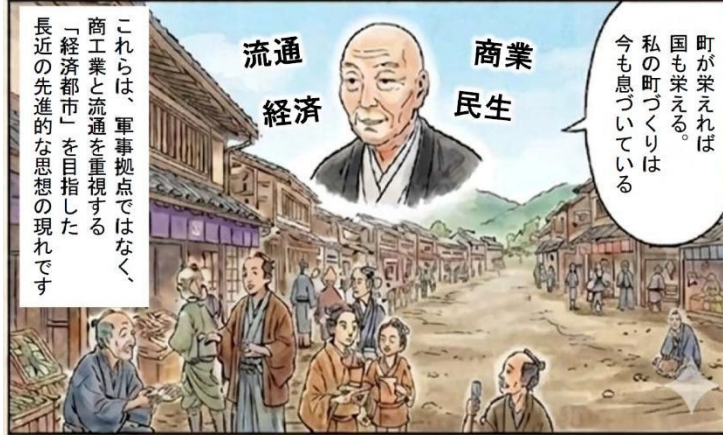
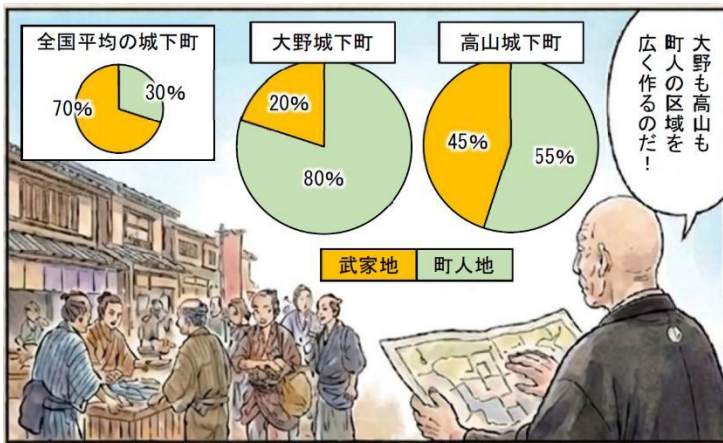
長近は織田信長の側近として長く仕えていましたが、まとまった領地として越前大野を手に入れたのは1575年、52歳の時でした。北ノ庄(福井市)の柴田勝家に協力をして越前支配に加わっていました。信長の亡き後に起きた「賤ヶ岳の戦い」をきっかけに羽柴秀吉の家臣になりました。その後の越中国

攻撃での活躍を経て飛騨国の攻略を命じられた長近は、当時すでに60歳を過ぎていましたが、わずか14日間で飛騨国を平定しました。

1586年に秀吉から飛騨国を与えられると、高山城を築き、その麓に城下町を整備したのです。

●大野と高山の共通点

こうして長近が手がけた大野と高山の城下町には、ある共通点が存在します。それは、当初から武家地よりも町人地の方を広く計画している点です。全国の城下町の平均的な比率は武家地が7割、町人地が3割と言われており、武士の居



住区が大半を占めるのが一般的でした。しかし、大野城下町はおおむね武家地2割・町人地8割、高山城下町はおおむね武家地4割5分・町人地5割5分という割合でした。

これから、長近が単なる軍事拠点としてではなく、領民の生活

研究を支える採集家たち

●日本の化石研究の特徴

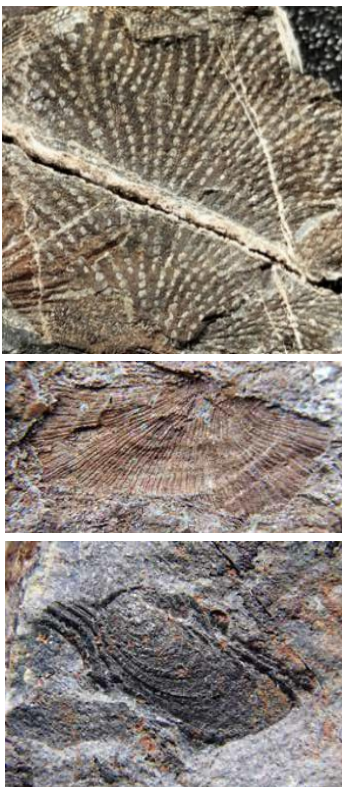
日本の化石研究の最前線を行っているのは、大学教授や学芸員たち専門家だけではありません。日本で発見された新種化石の多くは、化石研究が本業ではない「アマチュア化石採集家」によって発見されています。世界的に見ても、日本の化石研究におけるアマチュアの貢献度は突出しています。

専門家の現状は、論文執筆や講義、施設の運営業務などに日々追われており、野外へ出て発掘できる時間は限られています。地元で暮らすアマチュアはフィールドを熟知しているので、大雨の後の崖崩れ

を豊かにする「経済や流通の結節点としての城下町」を目指し、商業を重視した都市計画を好んでいたことがよく分かります。大野、高山の町並みには、地域の発展と物資の流通を最優先した長近の先進的な思想が、今なお色濃く刻まれています。(田中)

●真名川の化石を再注目

大野地球科学研究会は、昭和48年の設立以来、半世紀以上にわたり大野市の化石研究を支え続けている市民グループです。同会のメンバーが真名川上流へ地道に通い詰めて発掘してきた貴重な古生代、中生代の化石コレクションがあります。



上：古生代のコケムシ類
中：古生代の腕足類
下：古生代の二枚貝類
所蔵：大野地球科学研究会

真名川は、大野市西谷地区を源流とする川で、大野市街地を通り九頭竜川へ合流します。真名川上流は、化石の宝庫とされる同市和泉地区の地層の西方延長部にあたり、古生代〜中生代の化石を含む地層が分布することが古くから知られています。しかし、現在までに研究された資料は少なく、どのような化石が発見されているのか、詳細はよくわかっていませんでした。

2024年、同会が所有する真名川上流で採集された古生代の腕足類、ウミウリ類、コケムシ類や、中生代の貝類、植物などの化石の写真が奥越史料に掲載されたことをきっかけに、同会の化石コレクション

が真名川上流で発見されている化石の全容を明らかにする、学術的に重要な資料であると注目されました。

広大な研究フィールドを有する大野市において、新たな化石産地を探索するためには、アマチュアと学芸員の共働が欠かせません。真名川の化石に代表されるように、大野市の化石研究は、アマチュアたちの情熱に支えられてきました。アマチュアが化石を集め、プロの専門家がそれらを記載して論文を執筆する、この強固な協力体制こそが大野市の化石研究発展の原動力となっているのです。（酒井）

昭和のサステナビリティ

●衣服と暮らしの背景

昭和初期の衣服は、ワンシーズンごとに買い直すファストファッションではありませんでした。現在のよう

に気軽に購入することが難しかった時代、人々は身近にあるものを材料にしたり、1着を長く使ったりする

ために工夫を凝らしていました。

寒さが厳しい大野のような地域では、防寒や雨よけにも優れた知恵が見られます。たとえば、かつて使われていた「ござ帽子」や「どみの（胴みの）」は、自然素材の特性を活かしたものでした。「ござ帽子」の材料であるイグサは湿地で育つため調湿機能に優れ、「どみの（胴みの）」の



「ござ帽子」と「どみの」の材料

創刊にあたって

大野市には、城下町の歴史や豊かな自然、その中で人々が育んできた文化など、魅力的な文化財が多く残されています。本紙では、そうした地域の宝を分かりやすく紹介し、文化財をより身近に感じていただくことを目指しています。日々の中で文化財に目を向け、その価値を未来へとつなぐきっかけになれば幸いです。

本紙は、3月、6月、9月、12月の年4回、各10日に発行します。市学芸員が文化財に関する記事を毎号執筆するほか、食文化や季節行事などを取り上げた学芸員の視点によるコラムも掲載予定です。

配布は、市役所や学びの里「めいりん」、歴史博物館などで行っています。また、市ホームページからデータで取得することも可能です。



「引回合羽（ひきまわしかっぱ）」
所蔵：大野市民俗資料館

●令和へのつながり

このように昭和の衣服には、「長く

は寒冷期の外出着です。大野市民俗資料館が所蔵している引回合羽は、2枚の綿織物の布地の間に古文書を挟み込んで作られています。和紙は繊維が重なり合って空気を含まため保温性に優れ、さらに重ねることで風を防ぐ役割も果たしました。実用的な素材であると同時に、不要となった紙を無駄にしないアップサイクル（元の製品の素材をそのまま生かしながら価値を高めて再利用する）の知恵でもあったのです。

使う「無駄にしない」という暮らしの知恵が息づいていました。しかし昭和後期になると、ビニール製品や既製服などの普及によって、こうした手仕事の衣服は次第に姿を消していききました。それとともに、身近な素材で生活用品を生み出す技術や物を大切に作る心も失われつつあります。限られた資源の中で工夫を重ねて生活してきた人々の姿は、令和の私たちが目指す「サステナブル（持続可能）」な価値観にも通じるものなのです。（河瀬）



「リサイクル」「アップサイクル」「ダウンサイクル」のちがいは

パネル展「金森長近がつかないだ 越前大野と飛騨高山」の開催

期間：2026年6月23日（火）～8月30日（日）

場所：大野市役所 市民ホール「特別ギャラリー」

2026年度が長近が越前大野から飛騨高山に移封して440年の節目を迎えるにあたり、当時の長近の様子を紹介します。長近の大野郡入封から高山入封までの一連を、文献資料をもとにパネルで紹介합니다。

イベント情報

恐竜化石発見30周年記念企画展「九頭竜の恐竜たち」の開催

期間：2026年7月18日（土）～11月8日（日）

場所：くずりゅう化石ラボ ガ・オーノ

1996年に大野市で初となる恐竜の歯化石が発見され、近年では大腿骨化石が発見されています。恐竜化石の発見から30周年を迎えるのを記念して、本市における恐竜研究の成果について紹介します。